

第 3 回野菜需給・価格情報委員会における主な意見

1. 20 年産野菜全般

- ・ 中国産餃子事件等で国産回帰の動きがあり一時的に価格は上がったが、燃油や肥料が高騰する中、夏場にだいこんとキャベツの需給調整を行う等全体としては産地にとって厳しい年であった。
- ・ 去年秋までは安心・安全志向が強かったが、景気低迷が続く中で低価格重視の動きも見られ、原価率を抑えたい外食産業では再び中国産野菜を利用する動きもある。

2. たまねぎの需給

- ・ 加工用のたまねぎについては産地、業者とも在庫を抱えているとの情報もある。今後の北海道産の出荷状況により、これから出荷が本格化する府県産の価格に影響を与えることも考えられる。

3. 流通段階の動き

- ・ 外食産業では国産の需要が高まるものと期待されたが、低価格化が進んでいるため、引続き安い中国産を使う業者もいる。
- ・ コンビニやインターネット等、野菜の販売チャンネルが多様化している。

4. 消費をめぐる動き

- ・ 昨今の内食化（家庭内消費回帰）や小麦価格の高騰による米飯需要により、キムチやたくあんの消費が伸びている。
- ・ 「鍋ほか推進プロジェクト」はうち食や鍋人気に乗って一定の効果があったのではないかと。ラジオ等では、夕方のスーパーからねぎうどんが消えたとの報道があった。
- ・ 需要が多い時でも量販店では 1/2 カットや 1/3 カットでの販売が中心。1 個売り、1 本売りをすることが消費拡大のためには重要。
- ・ 景気の影響で「うち食」（家庭食）傾向が高まり、従来は売れなかった鍋本が売れている。特に、主婦の間では節約志向が高まっている。
- ・ 健康志向が高まり、旬の野菜や伝統的な食のスタイルを上手に取り入れることのできる和食もブームとなっている。